

菊水町文化財調査報告 第6集

川  
KAWA

沿 (1)  
ZOE

1 9 8 4

菊水町教育委員会

菊水町文化財調査報告 第6集

川  
KAWA

沿 (1)  
ZOE

1 9 8 4

菊水町教育委員会

## 序 文

合併前の菊水町は、江田・川沿・東郷・花族の四地区に分かれていました。現在の菊水町は文化財の町として多くの人々に知られていますが、それは江田船山古墳に代表されますように古墳の町としての印象が強いと思います。また、大半の文化財は江田地区に集中しており、特に川沿・花族地区は文化財の希薄な地区として、これまであまり注目されていなかったような観があります。菊水町教育委員会では、昭和58年度国庫補助事業として、これらの希薄な地区にメスをいれました。今回は川沿地区の江栗区を中心とする調査で、本文にありますように新発見の遺跡もいくつかありました。今まで看過されていた地区にも、こうした埋蔵文化財が発見されたことによって、町内文化財の分布も、新たな要素を加えつつあります。これらの成果をもとに、菊水町では、さらに文化財の保存・究明に力を注ぐ所存です。

調査にあたりましては、終始地主の方々、地元の方々にご協力いただきました。茲に厚く御礼申し上げます。

昭和59年3月31日

菊水町教育長 齋 木 義 男

一、  
1  
2  
3  
4  
二、  
三、  
1  
2  
3  
4  
四、

## 例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町における昭和58年度埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は昭和58年5月より昭和59年3月における国庫補助事業として、菊水町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は福島作蔵・池田道也が担当した。
4. 本書に使用した図の作成は、池田道也松浦安佐子が主に行った。製図は中山美紀が実施した。
5. 本書の編集は、福永光隆・池田道也が担当した。

第1図  
第2図  
第3図  
第4図  
第5図  
第6図  
第7図  
第8図  
第9図  
第10図  
第11図  
第12図



## 本文目次

一、調査区の位置と環境 .....	1
1. 江栗面頓寺区 .....	1
2. 久井原傾城塔区 .....	1
3. 久米野前畑区 .....	1
4. 焼米五輪塔群 .....	3
二、調査の目的・方法・経過 .....	3
三、調査概要 .....	4
1. 江栗面頓寺区 .....	4
2. 久井原傾城塔区 .....	6
3. 久米野前畑区 .....	9
4. 焼米五輪塔群（西福寺跡古墳群） .....	18
四、まとめ .....	26

## 挿図目次

第1図 昭和58年度調査区位置図 .....	2
第2図 江栗面頓寺区調査位置図 .....	5
第3図 上・久米野前畑区調査位置図    下・久井原傾城塔石棺位置図 .....	7
第4図 久井原傾城塔石棺実測図 .....	8
第5図 久米野前畑区グリッド層序図 .....	10
第6図 出土遺物実測図 .....	11
第7図        " .....	12
第8図        " .....	13
第9図        " .....	14
第10図       " .....	15
第11図       " .....	16
第12図       " .....	17

調査組織は次の通りである。

調査主体	菊水町教育委員会
調査責任者	斎木 義男（菊水町教育長）
調査員	池田 道也（菊水町歴史民俗資料館学芸員）
事務局	前川 一丸（菊水町歴史民俗資料館館長）
	福永 光隆（菊水町文化課係長）
	堤 郁子（菊水町文化課主事）
調査指導	菊竹 淳一（九州大学文学部助教授）
	福島 作蔵（荒尾市文化財保護委員）
調査協力	戸上 誓・中島 真澄
作業員	池田 英臣・小林ツヨミ・宮本 毅
	松浦安佐子・中山 美紀・原尾美代子
	山川 富代・中島 澄子・高野 愛子
	園田テル子・徳永 君子・戸上トミエ
	山川 フデ

# 一町内重要遺跡調査報告（6）

## 一、調査区の位置と環境（第1図参照）

合併前の菊水町は、江田、東郷、花族、川沿の四つの地区に分かれていた。埋蔵文化財の分布状況からこの四地区を見た場合、花族、川沿の両地区においては、その分布の希薄さは否めない。しいてあげれば、二～三の横穴群が目立つ程度で、これまであまり注意が払われていなかったような観がある。しかし、近年川沿地区から石器や土器などが採集されていることを聞いていたため、昨年菊池川対岸の赤穂原台地を調査したこともあり、本年度は川沿地区の江栗区を中心とする発掘調査を実施した。

川沿地区には、前述のように埋蔵文化財が乏しく、内田区にある今城横穴群、古閑横穴群、深田浦横穴群が知られているにすぎない。

### 1. 江栗面頼寺（えぐりめんとんじ）区

同区は、南関および三加和との町境付近に位置し、菊水町の北西端にあたる。付近一帯の標高は、88～89mを測る。土地の利用状況は、台地のほぼ70%が桑畑で、あとは牧草地やスイカ畑のビニールハウスがところどころに見られる程度である。

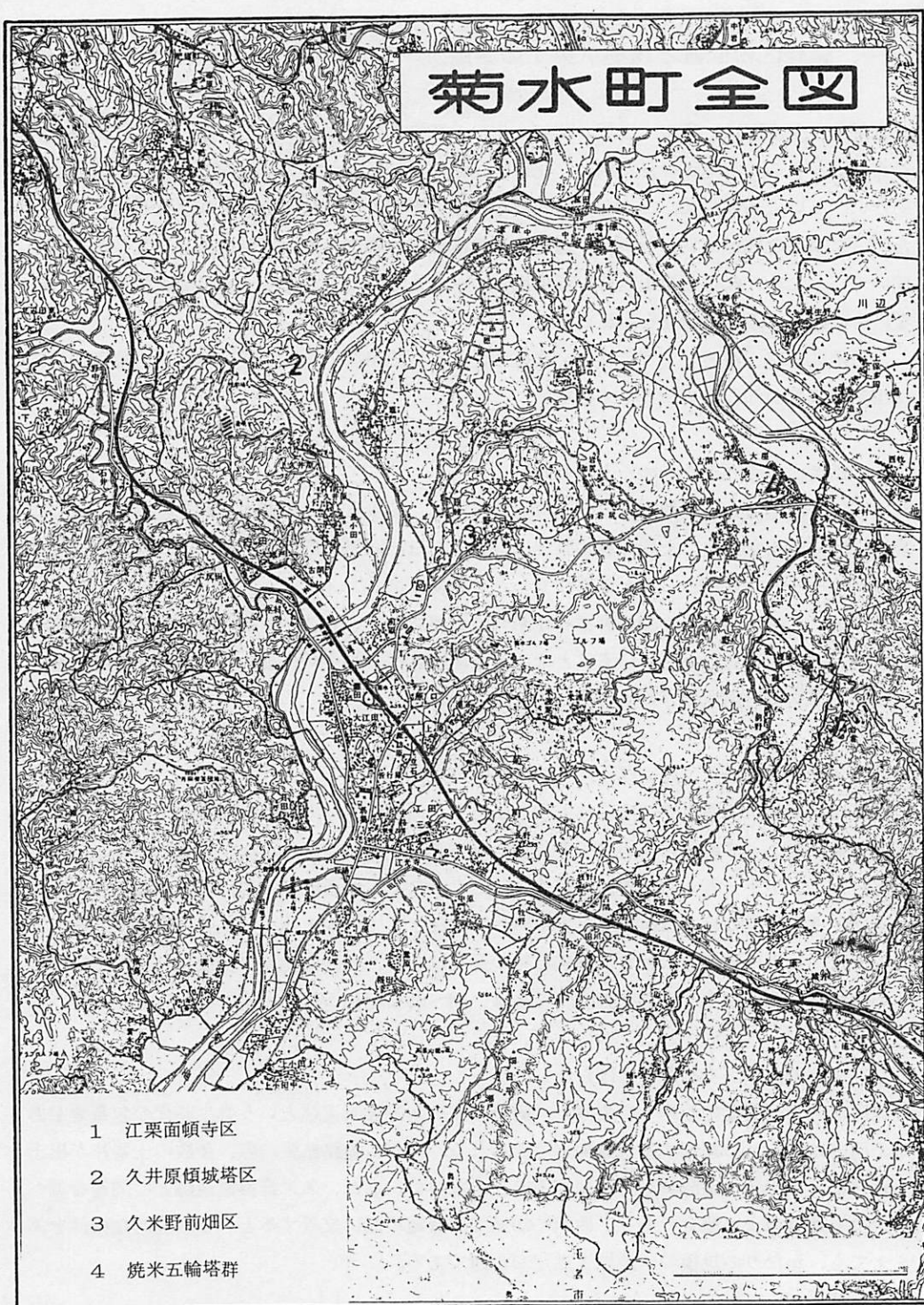
数年前、スイカ畑を拓く際に磨製石斧が一点採集されていることや、表面採集で土器細片がわずかではあるが見つまっていることなどを考慮すれば、弥生時代を中心とする住居址等遺構が広がっている可能性がきわめて高い地区と思われた。

### 2. 久井原傾城塔（ひさいばるけいせいがとう）区

同区は、菊池川の西岸に迫る山林の頂きにあり、周囲はすべて杉におおわれている。現在は、人工の植樹によって菊池川周辺までの見透しはできないが、本来はかなり見晴らしのよい場所であったことが十分考えられる。平坦地はほとんどなく、傾斜地の大半には杉が植えられている。同区は新発見の箱式石棺群で、古墳時代の遺跡としては約1km南に久井原高野横穴群がある。また、付近一帯にはこれまで箱式石棺の発見はなく、今回の発見を契機として、さらに詳しい調査が必要となろう。調査地点の標高は、64～65mを測る。

### 3. 久米野前畑（くべのまえばたけ）区

同区は久米野集落の西寄りに位置し、隣接して久米野奥原遺跡という弥生時代の包蔵地がある。同区は、それに連続する包蔵地と考えられる。昨年、道路拡張の際、多数の土器片が出土したため、本年度に確認調査を実施することとなった。また、久米野奥原遺跡との関連を調べる上でも都合のよい機会であり、西南に傾斜する台地の端に位置するという地理的な条件をふまえても、かなりの規模の包蔵地と推定した所である。



昭和58年度調査区位置図（第1図）

#### 4. 焼米（やいごめ）五輪塔群

正しくは、西福寺跡古塔群と呼んだほうがいいのかもしいたが、地元では、焼米五輪塔群のほうが通じやすいので、この項ではこちらの名称を用いた。

当地は、一日中ほとんど日が当たらず、加えて近くにあるわき水のため、きわめて湿度が高い所である。石塔群は、一面を蘇苔類で覆われている状態であった。

すぐ真上の山麓には、中世の山城が築かれ、焼米区と隣接する大屋区には、大屋横穴群がある。また、これらに続く台地には、弥生時代を中心とする包蔵地が広がっている。

#### 二、調査の目的、方法、経過

調査の主な目的は、『江栗区を中心とする埋蔵文化財包蔵地の分布確認』であった。最近、少量ではあるが土器片や磨製石斧が採集されていることや、これまで江栗区を含む川沿地区に組織的な調査が実施されていないことなどを考えると、早い時期に埋蔵文化財の分布把握を主とする基礎資料の充実をはかる必要があった。調査の方法は、江栗面頼寺区においては、順序の確認と包含層があればその年代等の把握のためのトレンチによる発掘、久井原傾城塔においては、遺跡の種類が箱式石棺群らしいということが下調べの段階で判明していたため、杉木立ちの間をぬってトレンチを設定し、さらに1m×1m弱の小グリッドを不規則に設定した。久米野前畑においては、周辺の遺跡との関連、さらに事前に採集した遺物等から年代・性格も一応推定できたため、住居址等遺構の検出を目的とした4m×4mのグリッドを設定した。焼米五輪塔群（西福寺跡古塔群）については、石塔の復元および周辺の整備を中心とした作業を実施した。

調査経過の概略は次の通りである。

5月1日～31日 調査地区の下調べ。

6月1日～30日 発掘予定地の選定。

8月8日～31日 関連資料の整理。

12月1日～8日 焼米五輪塔群の調査。調査指導に荒尾市文化財保護委員福島作蔵氏を招く。

12月12日～16日 江栗面頼寺の調査。二ヶ所に幅1.5mのトレンチを設定。

12月27日～28日 遺物の整理。

1月4日～9日 遺物の整理。

1月18日～27日 久井原傾城塔の石棺調査。

2月1日～29日 調査地区の地形測量。久米野前畑区の調査。

3月1日～27日 遺物の整理および実測。報告書製作。

3月27日で作業完了。



### 三、調査概要

調査は次の順序で実施した。焼米五輪塔群（西福寺跡古塔群）→江栗面傾寺区→久井原傾城塔区→久米野前畑区。次に、各地区の層序・遺構・遺物の概要を述べる。

#### 1. 江栗面傾寺区（第2図参照）

二ヶ所にトレンチを設定開掘した。発掘した順序に従い、それぞれ第1トレンチ、第2トレンチとする。

##### <第1トレンチ>

第1トレンチを設定した土地の現況はスイカ畑である。以前は桜を主体とする樹芸用樹木を植えてあり、これらの植え替えの際に磨製石斧（第6図-4）が一点出土している。トレンチは1.5 m×4.0 mの大きさで、遺構・遺物の検出はなかった。

層序は次のとおりである。

I層……耕作土。褐色を呈し、わずかに砂粒を含む。

II層……混砂暗褐色土層。

III層……褐色土層。やや粘性がある。

IV層……地盤。明褐色粘質土層。

##### <第2トレンチ>

第2トレンチを設定した土地の現況は牧草地である。1.5 m×17mのトレンチを設定開掘した。遺構の検出はならなかったが、縄文晩期の土器（第6図1～3）が数点出土した。本書には、明らかにそれとわかる口縁部の3点を掲載した。いずれも若干内傾し、「く」の字形に屈曲する胴部へと続く器形になるものと思われる。3点とも内外に条痕が認められ、3のそれは他に比べやや浅めの条痕となっている。いずれも刻目突帯を有している。

層序は次のとおりである。

I層……耕作土。褐色を呈し、砂粒を含む。

II層……混砂明褐色土層。

III層……混砂褐色土層。

IV層……明褐色土層。中世のものと思われる土器細片がわずかに出土。

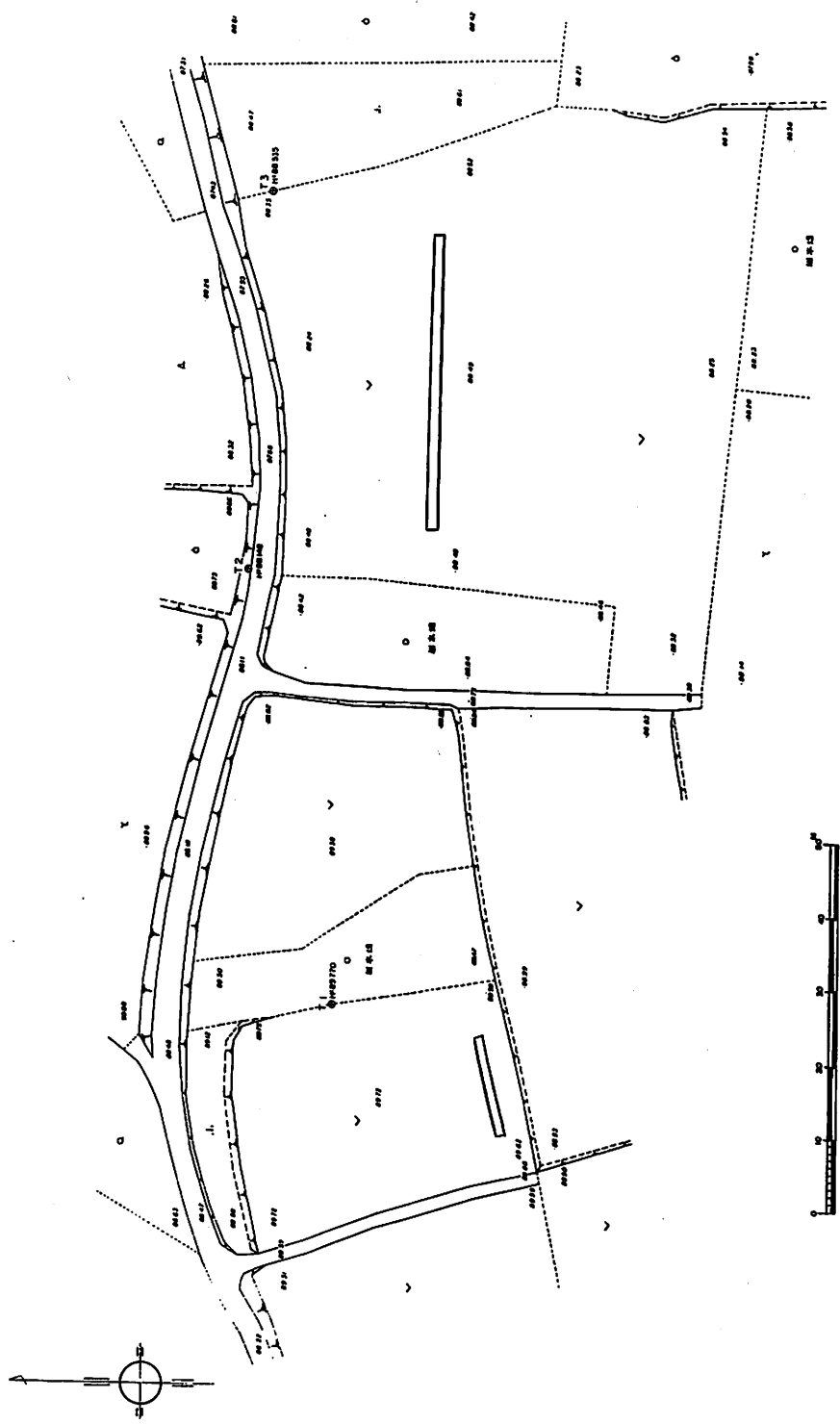
V層……暗褐色土層。縄文晩期の土器が出土。

VI層……地盤。粘質明褐色土層。

##### <小結>

今回の発掘調査の結果からみれば、同区には、それほど密に遺構・遺物が包蔵されていると

威  
 レ  
 を  
 チ  
 屈  
 は  
 と



(第2図 江栗面頤寺区調査位置図)

は言い難い。しかし、少量ではあったが縄文～歴史時代にかけての遺物が出土したことはまぎれもない事実である。さらに、発掘した面積は全体から見れば、ごくわずかな部分でしかない。これらのことを総合して考えると、周辺には良好な包蔵地が眠っている可能性も十分にありうる。

## 2. 久井原傾城塔区（第3図参照）

江栗面傾寺区に続く、新発見の遺跡である。ひょうたん形になった山頂の両端にそれぞれ一基づつ（計二基）の箱式石棺が見つかった。互いに南北約30m離れて位置している。北側に位置するほうを1号とする。

### <1号石棺>（第4図参照）

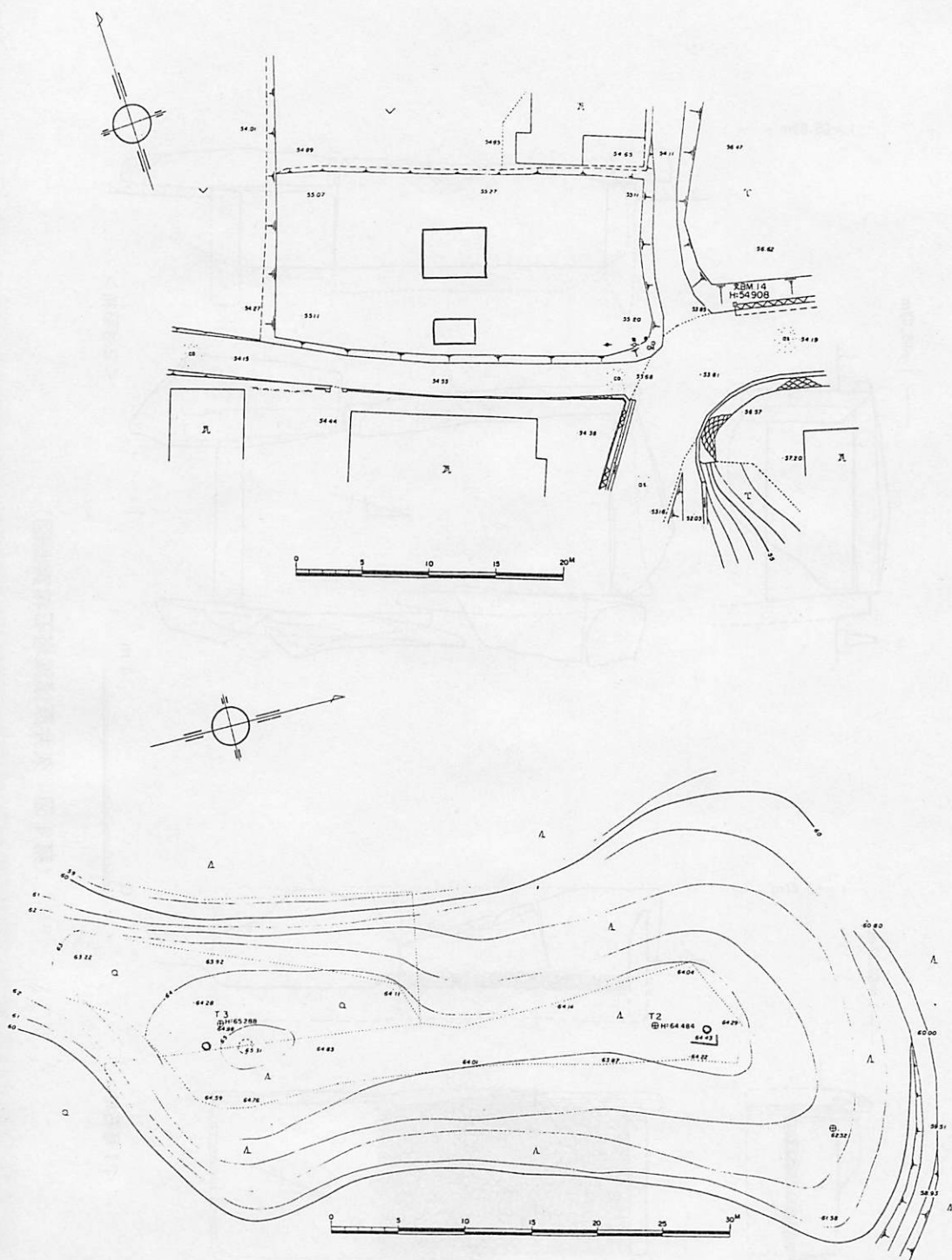
N-29°-E に主軸をとり、やや軟質の凝灰岸の切り石を用いた構成である。風化は著しいが、石材は全体的に薄手で、かなり丹念な仕上げであったことがわかる。当初より蓋石はなく、側壁の上部が露出していた。南側短壁は完全に失われ、西側長壁は、その中央にわずかな痕跡をとどめる程度である。北側短壁は一枚切石による造りで上部を一部欠失しているものの、ほぼ初原の位置を保っていると思われる。東側長壁は、切石を二枚使用した造りで、二枚とも上端の一部を欠失している。いずれも風化が著しい。床面には小砂利を敷きつめ、その厚さは5cm～6cmを計る。また北側短壁の内部には、赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。全体の状況から、盗掘を被っていることは明白で、特にその痕跡は南側に著しい。床面の小砂利は、盗掘によって南側の3分の1ほどがまったく失われている。

### <2号石棺>（第4図参照）

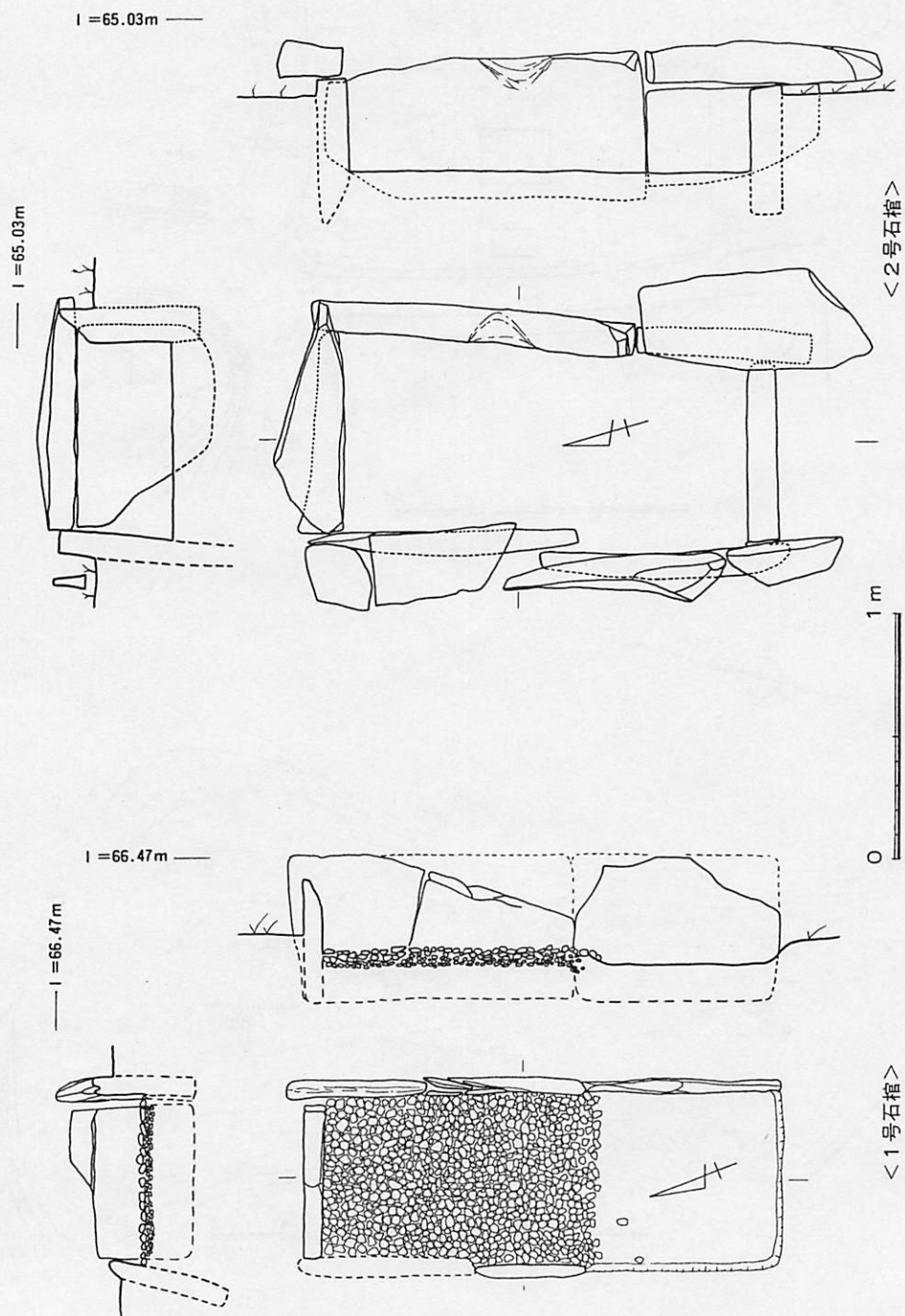
N-28°-E に主軸をとる。安山岩の切り石を用いた構成であるため、石材自体が1号のそれと比べて、かなり硬質で重厚な印象をうける。2号石棺も当初より蓋石を消失していた。しかし、1号石棺がその一部を露出していたのに対し、2号石棺は完全に土中に埋もれていた。杉木立ちの間に不規則に開掘した1m×1mの小グリッドに側壁のわずかな部分が露呈したためかろうじて発見できた石棺である。

北側短壁は、逆梯形の一枚石を利用し、他の側壁と高さを一致させるためにか、その上に一個の細長い三角形の切り石を重ねている。東側長壁は、二個の切り石からなり、南側の短い側壁の上には、高さをそろえるために別の切り石を横にして重ねている。南側短壁は、別に形の整った一個の切り石で構成されている。西側長壁は二個の切り石を用い、それぞれに高さをそろえるために、細長い切り石を重ねている。内部には、蓋石であったと推定される石塊が砕かれて散乱していた。また、土師器と鉄器の細片がわずかに出土した。床面には全体に赤色顔料が敷かれていた。これも1号石棺同様盗掘を被っていたことは明瞭であるが、全体的な遺存度は、1号よりも良好であった。





(第3図 上. 久米野前畑区調査位置図 下. ○印、久井原傾城塔石棺位置図)



(第4図 久井原傾城塔石棺実測図)

### 3. 久米野前畑 (第3図参照)

現況は野菜畑である。1.6 m × 3 m と 5 × 4 m のグリッドの2つを設定開掘し、それぞれ第1グリッド、第2グリッドとする。

#### <第1グリッド>

多数の弥生式土器が出土した。遺構の検出なし。層序は次のとおりである。(第5図参照)

I 層……耕作土。混砂暗褐色土層。土器細片を含む。

II 層……混砂褐色土層。土器細片を含む。

III 層……粘質暗褐色土層。土器片を含む。

IV 層……弱粘質黒褐色土層。土器片を含む。

V 層……粘質明褐色土層。大きめの土器片を含む。

VI 層……  
     { VI-a ……弱粘質褐色土層  
       VI-b ……土質はVI-aに近似。境界に明褐色の筋(ライン)があり、そこには炭化物が見られる。

VII 層……地盤。粘質明褐色土層。

#### <第2グリッド>

第1グリッドの結果を参考に、住居址等遺構の検出を目的に設定したグリッドである。その結果、遺構の検出はならず、遺物も第1グリッドと比べるとかなり少なかった。層序は次のとおりである。(第5図参照)

I 層……耕作土層。混砂褐色土層。

II 層……混砂明褐色土層。

III 層……弱粘質黒褐色土層。第1グリッドのIV層に相当する。

IV 層……粘質明褐色土層。第1グリッドのV層に相当する。

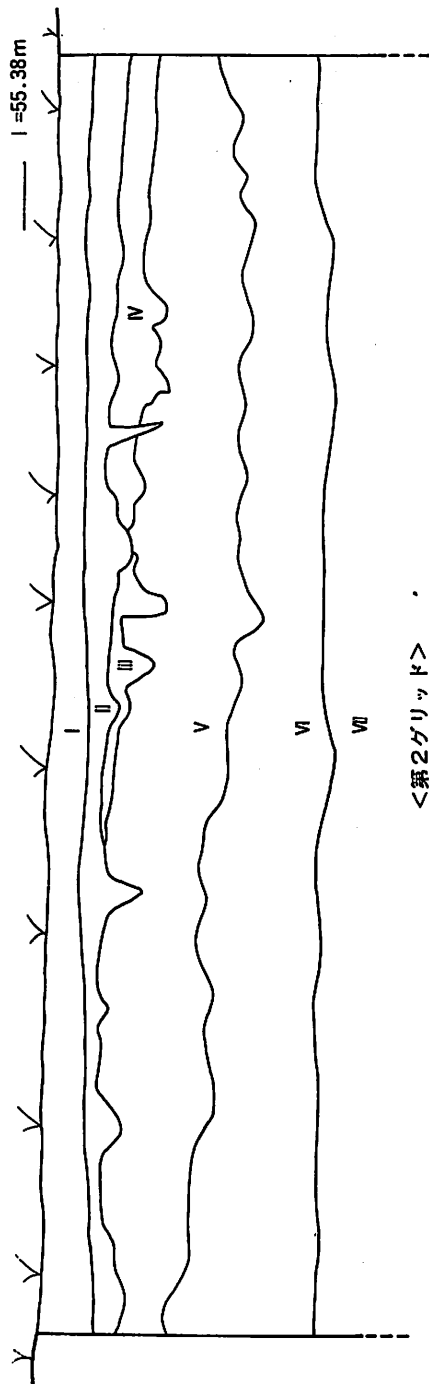
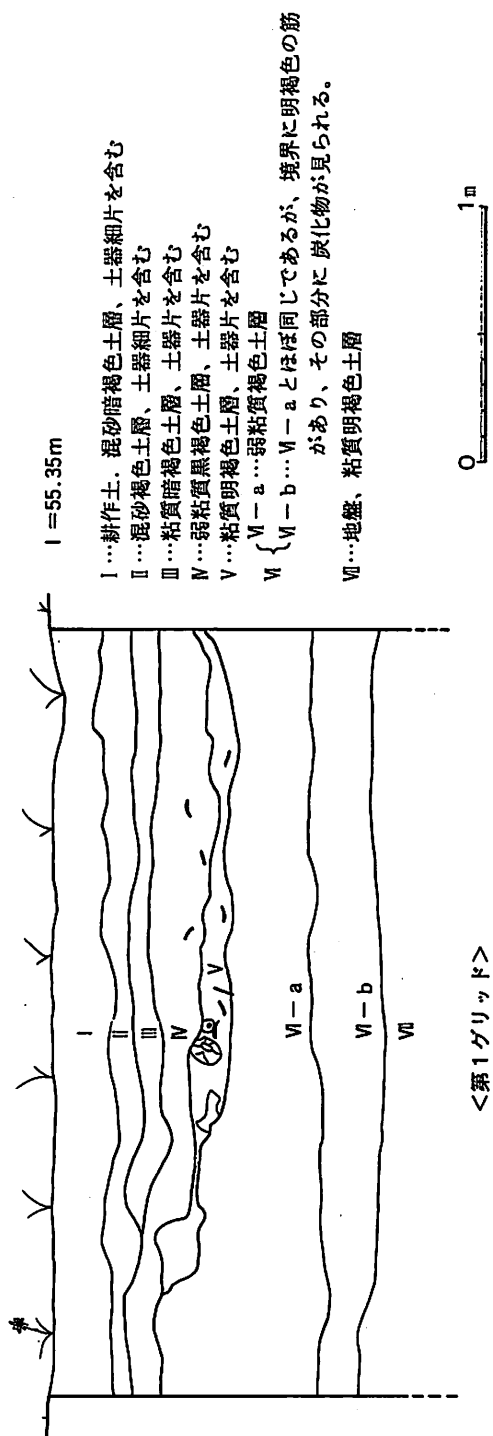
V 層……弱粘質褐色土層。

VI 層……地盤。粘質明褐色どそう。

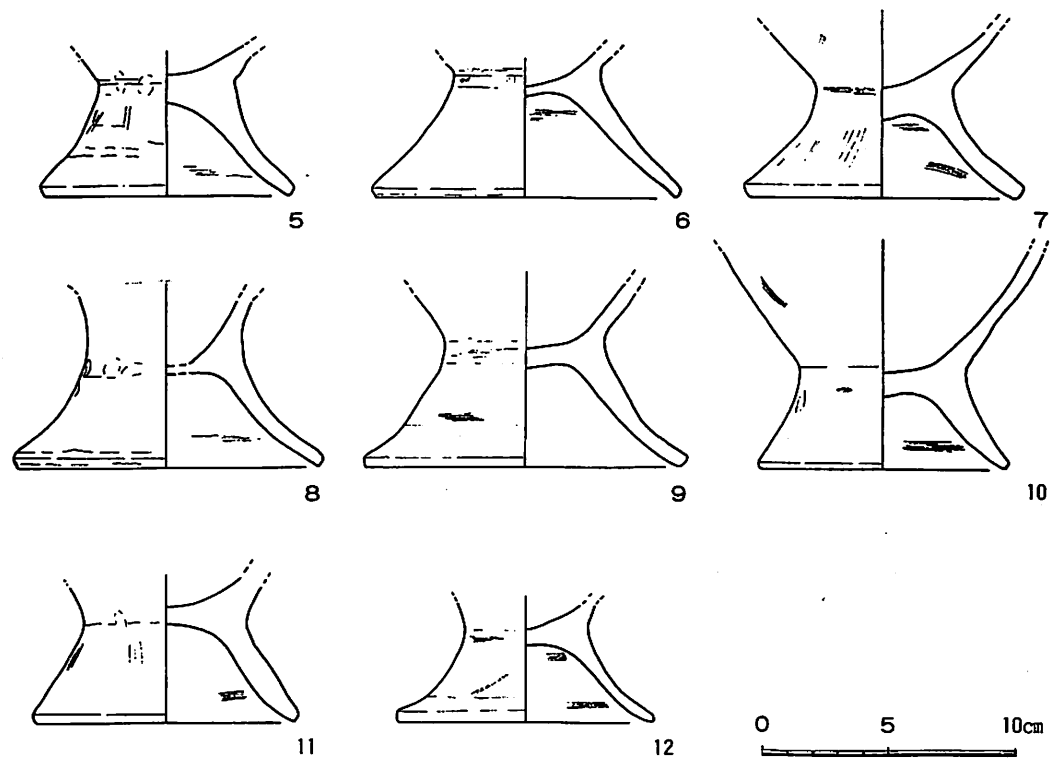
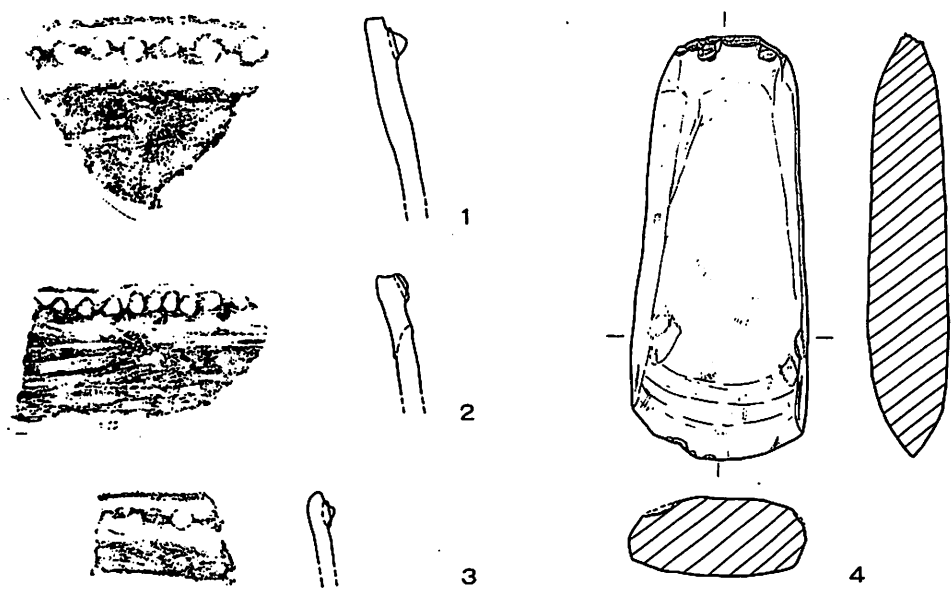
#### <土器> (第6図～第12図)

土器は第1グリッドを主体に、発掘面積の割には多数出土した。すべて弥生式土器で、器種は、壺・甕・盃・器台・高坏・ジョッキなどが見られる。小片が多く、接合できるものは、きわめて少量であった。また、甕に伴うと思われる台(第6図～第8図)が量の上では目立った。口縁部(第8図～第11図)には小片が多く接合もあまりできなかったため、図示した口径は残存部から割出した推定作図のものが多い。

土器の他に石器(第12図)が一点出土した。薄手の緑色片麻岩製で刃部だけが磨滅している。物を切るためよりも、むしろ土掘り具としての機能が考えられる。

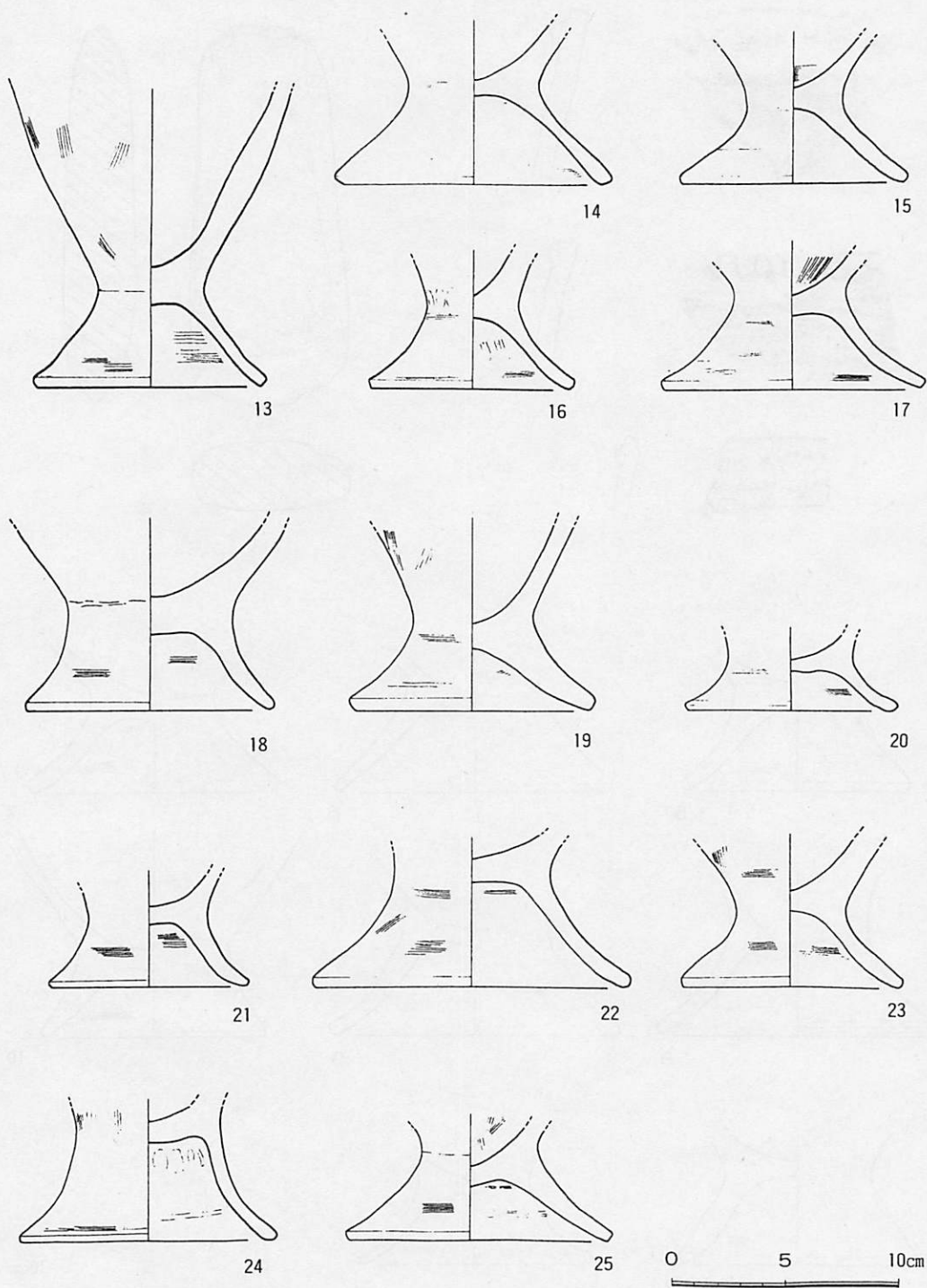


(第5図 久米野前畑区グリッド層序図)



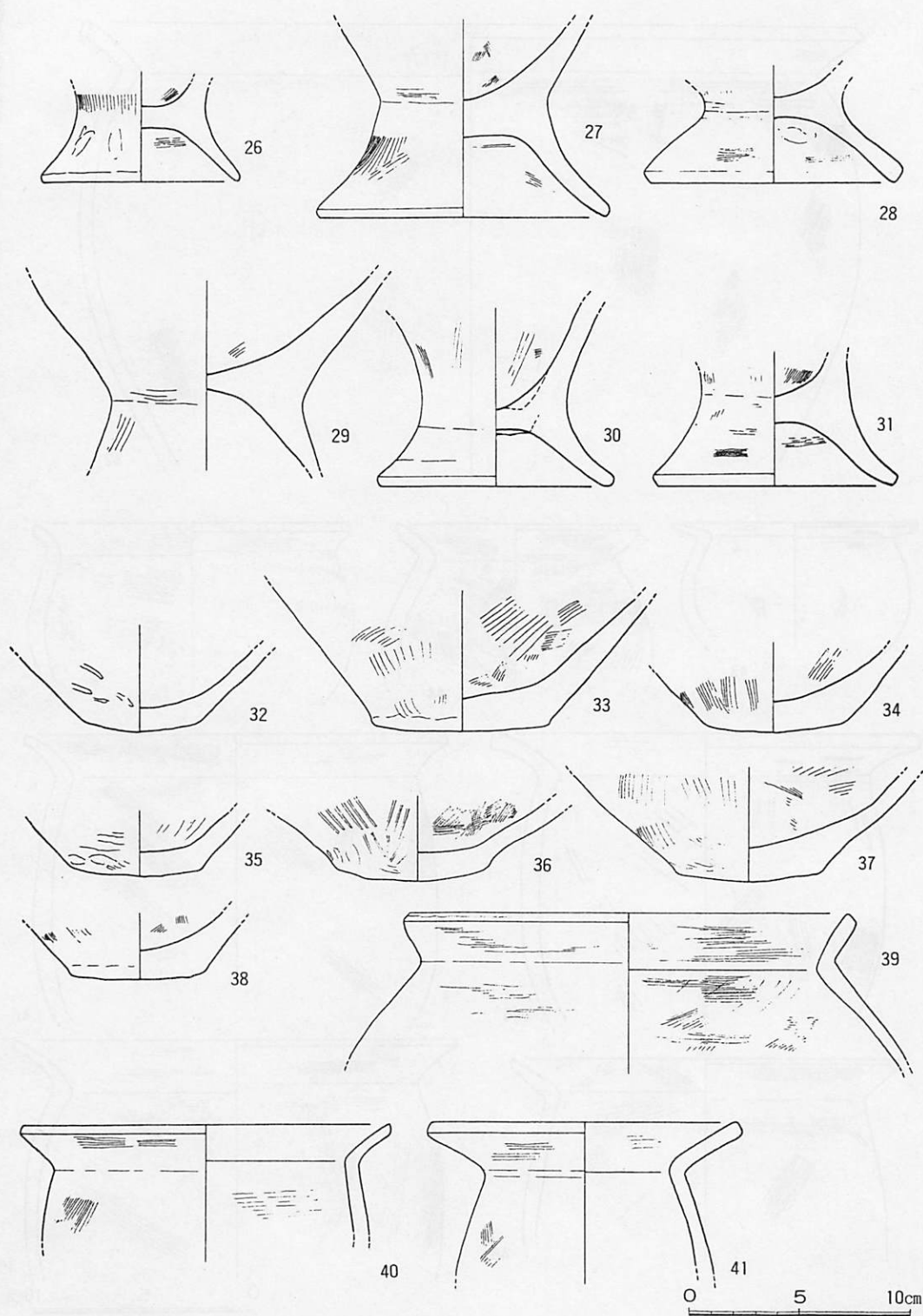
(第6図 出土遺物実測図)

大分県立博物館蔵 大分県立博物館蔵

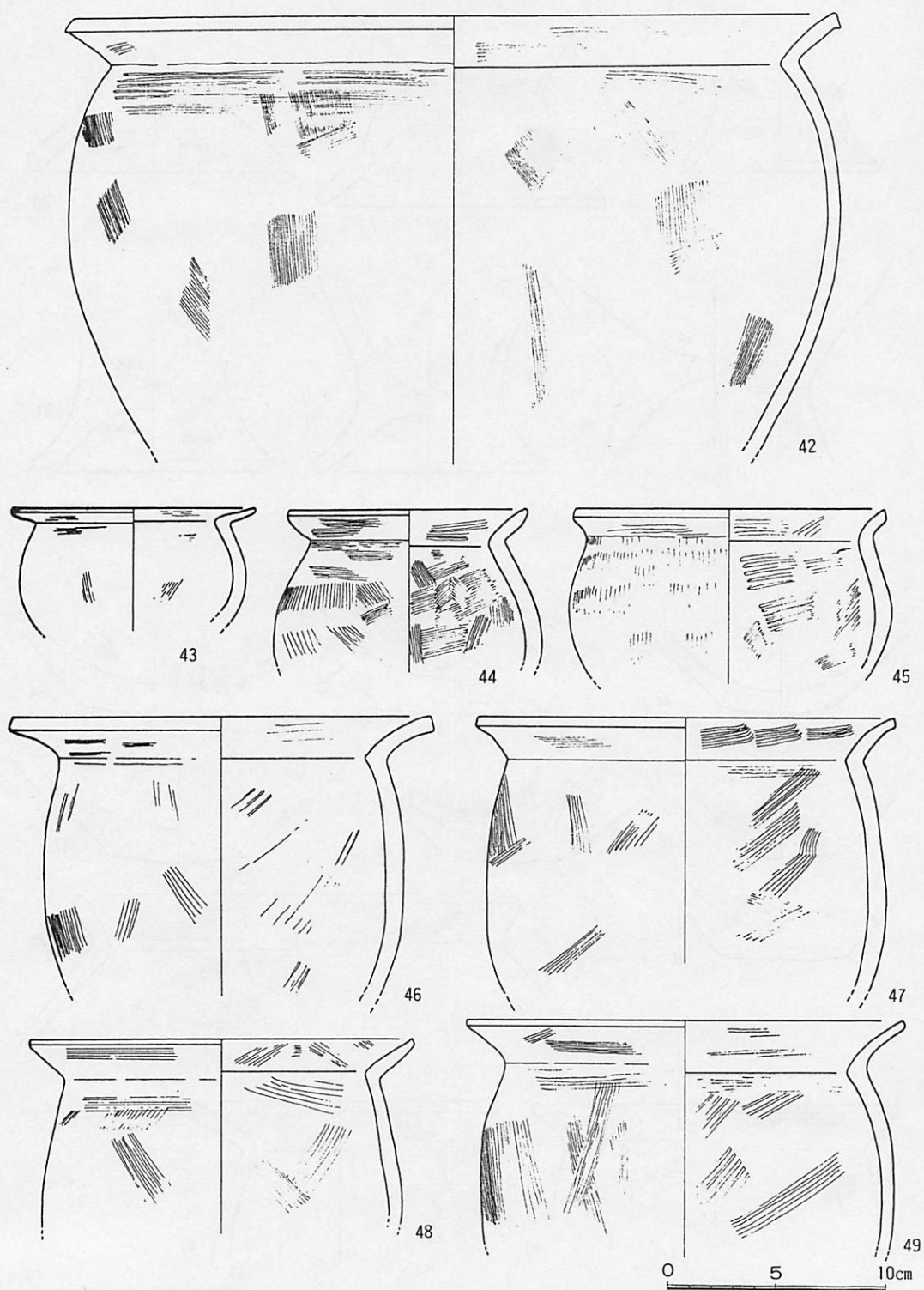


(第7図 出土遺物実測図)



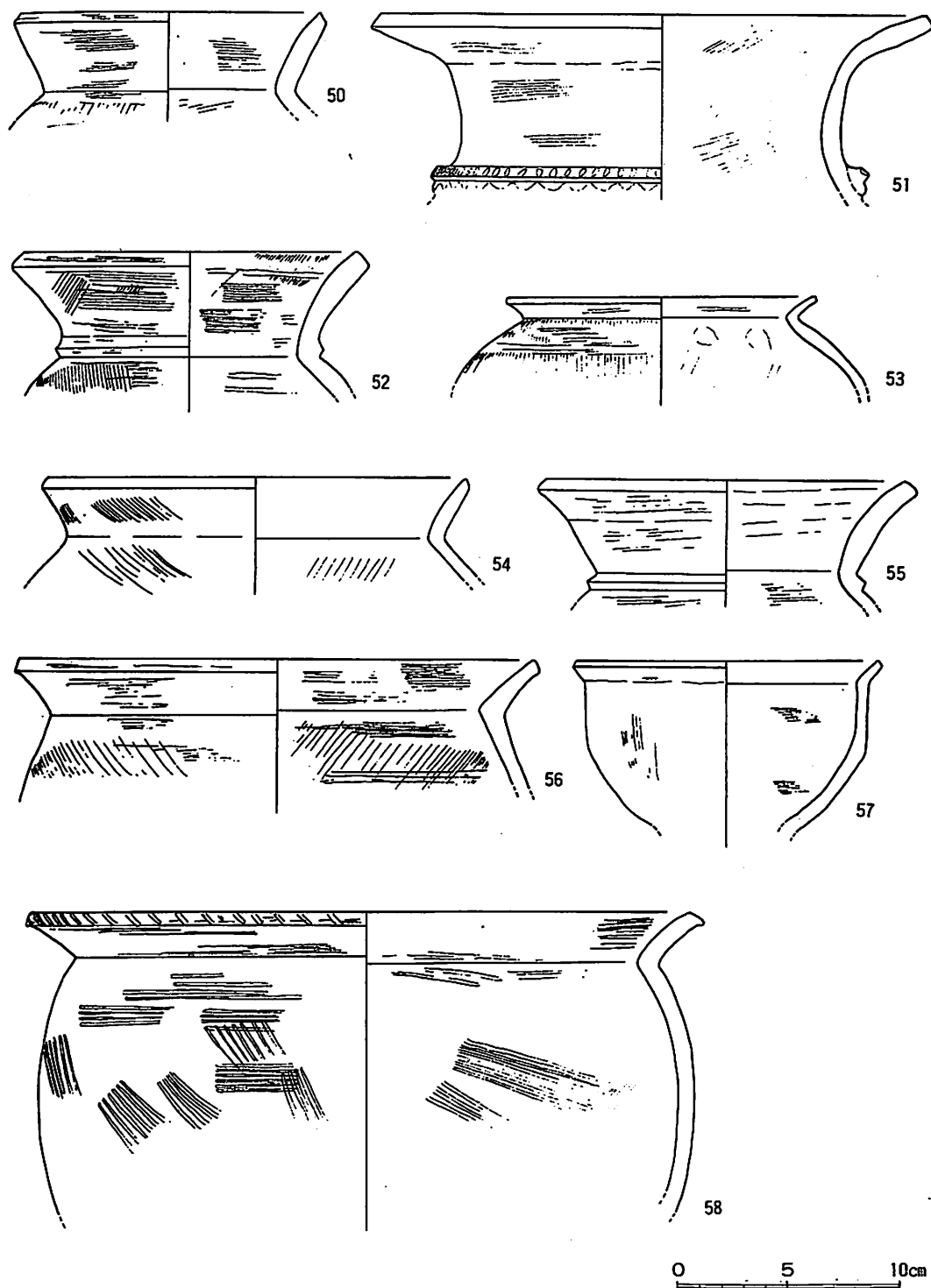


(第8図 出土遺物実測図)

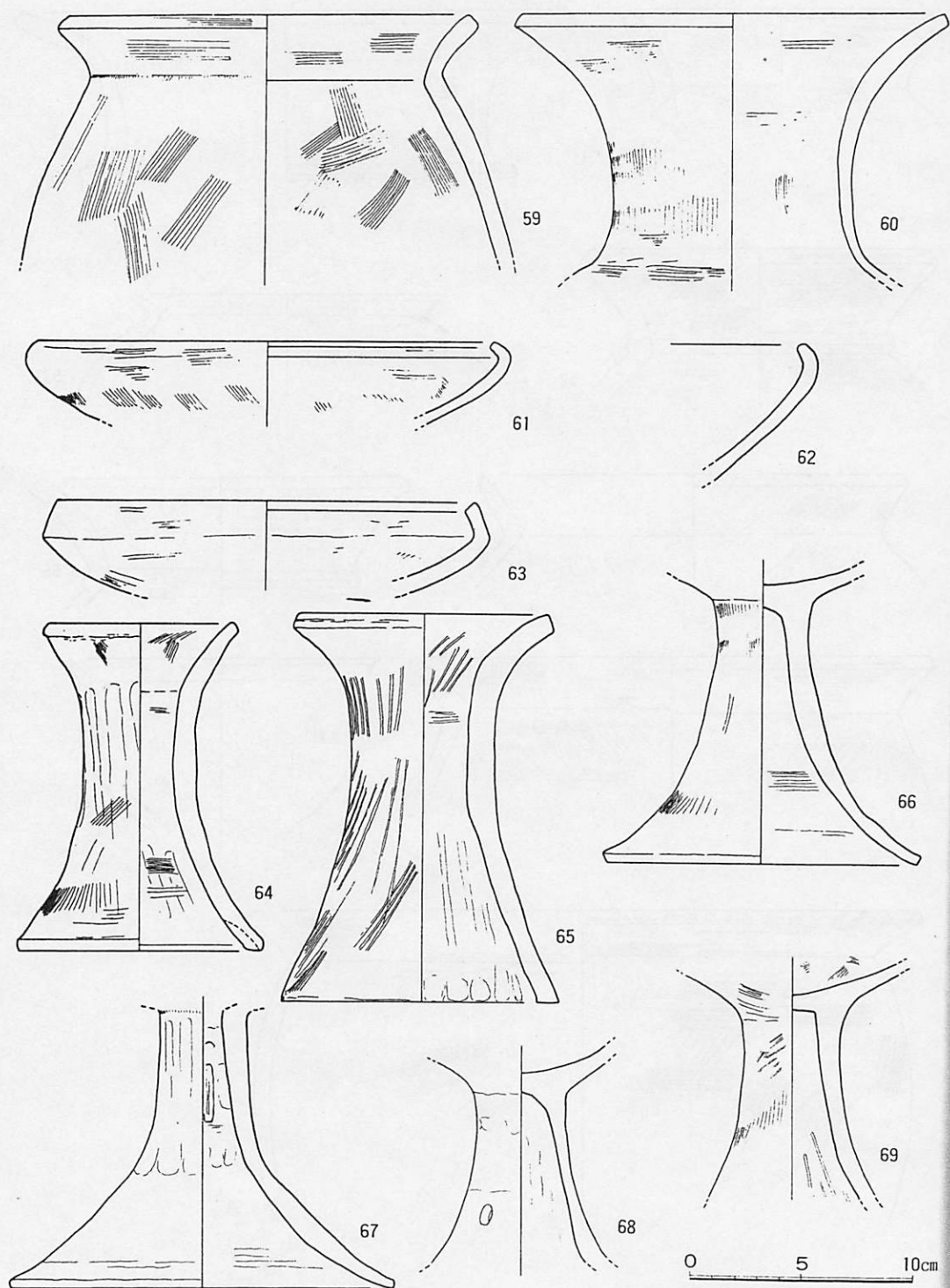


(第9図 出土遺物実測図)





(第10図 出土遺物実測図)



(第11図 出土遺物実測図)



0

7

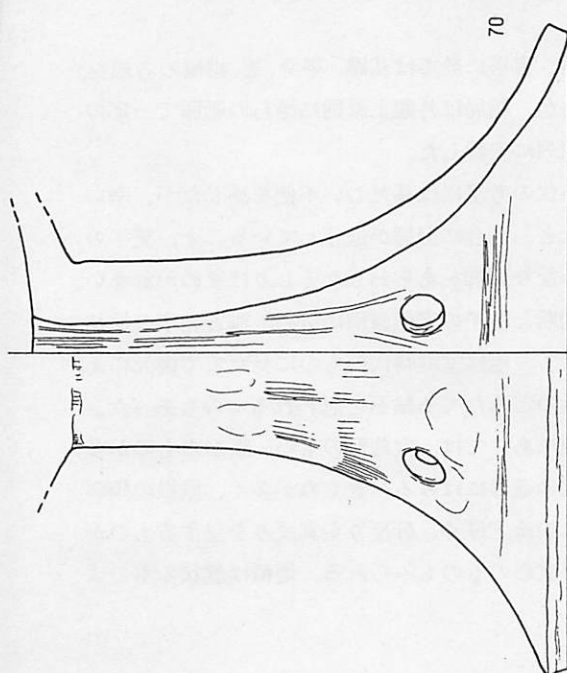
66



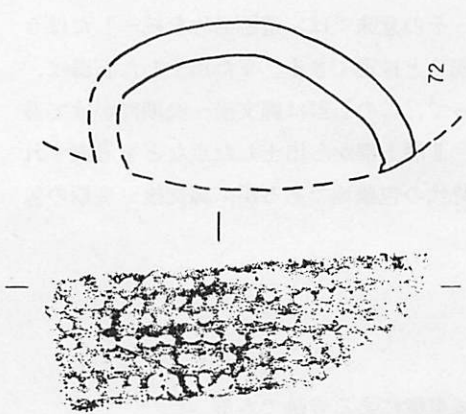
7

9

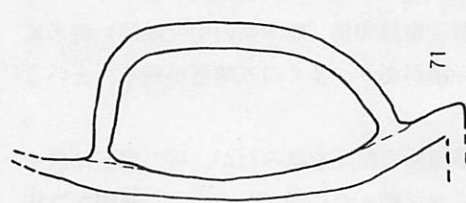
10cm



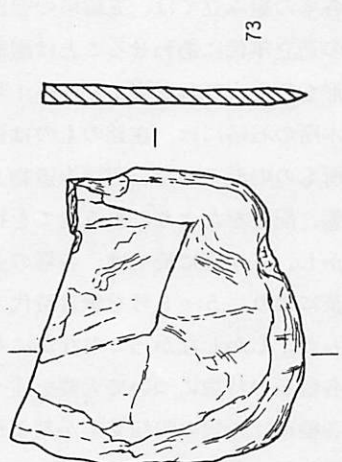
70



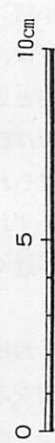
72



71



73



(第12図 出土遺物実測図)

### ＜小結＞

同区は、久米野奥原遺跡に続く包蔵地と考えられ、その意味では、遺跡名称を統一したほうが適当と思われる。広がり、さらに北～西方向へ続くと推定できる。また出土した石器は、町内では松坂原遺跡から多数出土している。したがって、この石器は縄文後～晩期にかけて普通に見られるものと同種であると考えられる。また、Ⅱ層上部から出土した点などを考慮すれば、いずれかからの混入であろう。付近一帯は弥生時代の包蔵地であるが、縄文後～晩期の包蔵地が近くに眠っている可能性も考えられる。

### 4. 西福寺跡古塔群

復元調査者 福島作蔵

概説 西福寺跡は菊水町の東、中世の東郷荘焼米城東麓にある寺跡である。

西福寺の寺号は金塔山（「国郡一統志」）禅洞家山鹿郡杉村日輪寺（「肥後国誌」）。本尊は阿弥陀如来（「国郡一統志」）なりという。熊本県文化財報告書第30集「熊本県の中世城跡」焼米城の項には「城山の東側麓には城主の寺と伝える西福寺跡があり、多くの五輪塔が残る」という記事がある。然し城主名は記してはいない。

今回西福寺跡焼米観音堂前に散乱していた中世石塔遺物の復元を試みたが、塔の部石は溝中や地中にも埋没したものもあり、これを寄せ集めて塔形を整えたに過ぎないので、厳密な意味の復元は一基もなく、はじめから一具と想定して組立てることは殆ど不可能な状況にあった。組み立てた石塔は、五輪塔と宝塔10数基であるが、考証のためには石塔群と対向する江戸時代塔姿14基、参道石階下の石幢、並びに焼米城本丸跡の祭禪石造物、焼米村中の熊野宮前角宝塔の調査をも行った。

各塔の組み立ては、五輪塔の空風火水地の各輪、宝塔に於ては基礎、塔身、笠、相輪の各部をその造立年代にあわせることは困難な仕事であるが、結局は外観上原則に悖らぬ範囲で一応の塔形を整え、これを東より西へ1号～13号まで並列に安置した。

本所の石塔には、在銘のものは皆無で、造立年代の考證には甚だしい不便を感じたが、幸い他所ものの混入のない西福寺遺物と思われることと、割合に旧態が遺存していること、梵字の字態、配置をたよりに組み立てを行なったが、かなり馬脚をあらわしたそしりはまぬかれまい。しかし、五輪塔に於ては、各塔の主要部の様式判断と種子の字態識別に努め計測と梵字の採拓作業により、5・6号を鎌倉時代末期の塔に仕立て、他は室町時代のものに見たてて復元にあたった。しかしながらこのなかにも鎌倉時代のものとみだてる輪石と思われるものもあった。

各輪石の特徴について大要を述べると、空風輪にあっては、宝珠形のもの、團形のものが多く各輪には正規の四転梵字が刻まれていた。火輪の造形にはみるべきものが多く、屋根の傾斜に緩傾斜、急傾斜のものが見られた。軒は古いものほど厚く、軒反りも真反りを呈するものが数基あった。水輪は真球に近いものが数基あるが立形のものもみられる。地輪は盤状のものよ

り、腰高のものが多く混在するが、そのなかに「ア」の種子を有するものは比較的少ない。鎌倉時代のものと比定されるものは殊に立派な四転梵字が描かれ、なかには月輪で種子を囲い蓮花座に据えたものが一基あった。以上のように各輪を観察するに五つの輪石が首尾一貫した性格を備えたものは皆無である。

宝塔は塔構成上最主要部の塔身と基礎、相輪が残されているが、笠石がないのは惜しいことである。殊に、宝塔は数的には少ないが種類の上にはユニークなものがみられた。有頸丸肩円筒形の巨大塔や球心の塔心をもつもの、この基礎と思われる方盤上に反花座を荘厳した請座に佛供養の納入孔を有する。この特殊な宝塔は宝瓶塔という。山鹿、三加和、菊水、植木地方に見られるものである。また、はじめ笠塔姿と見たてたものは、周辺調査を実施して角宝塔の一種であることも確認することができた。

堂前石階下にある石幢は磨耗や破碎により考證を妨げたが、明応9年(1500)の造立年紀をもち、焼米秀秋の後刻銘がみられるのは、焼米城主が焼米氏であったことの手がかりが得られることも可能となるだろう。堂前に所在する江戸時代の墓石が西福寺といかなる関係のものであるについては、知り得る資料はないが、一応調査を実施して今後の資料に遺したい。

焼米城主郭にある城主一族を祀った碑といわれる(「熊本県中世城跡」) 碑石の調査をしたがこれも今後の研究素材となると思ったので記録にとどめた。

### 〈古塔群の調査記録〉

#### \*1号 五輪塔 総高86cm (図版12-1)

地輪 正面幅30cm 高さ27cm 比高0.90 種子正面「ア」 他は無種子

水輪 心径30.5cm 高さ24.0cm 比高0.79 無種子

火輪 軒の辺長36.0cm 軒厚 3.0cm 棟の辺長15cm 高さ19cm 比高0.52 種子は五輪梵字「ヲ」の四転、彫りはよい、軒反りも強い。

空風輪 高さ16cm (内田五輪塔に類似)

#### \*2号 五輪塔 総高97.0cm (図版12-2)

地輪 正面幅35.5cm 高さ18cm 比高0.57 無種子。

水輪 心径37.5cm 高さ30cm 比高0.81 種子は五輪梵字「バ」の四転。

火輪 軒の辺長31.0cm 軒の厚み 5.0cm 棟の辺長14cm 高さ28cm 比高0.45cm 無種子  
底部の破損が大きい。

風輪 直径17cm 高さ7cm 破損中位。

空輪 直径16cm 高さ13.0cm 円形。



＊3号 五輪塔 総高 115cm (図版12-3)

地輪 正面幅43.0cm 高さ29cm 比高0.57 種子は五輪定種子「ア」の四転。  
水輪 心径48.5cm 高さ34.0cm 比高0.71 種子は五輪定種子「バ」の四転。  
火輪 好塔であるが破損がひどい。 正面幅55～60cm 軒の厚み 6.0cm 棟の長さ21.0cm  
高さ25.0cm 比高約0.42 軒反りは強い。  
風輪 直径22.0cm 高さ 8.5cm  
空輪 直径21.5cm 高さ19.5cm 種子は五輪定種子「キア」の四転。  
※火輪以上には鎌倉時代末の雰囲気がある。

＊4号 五輪塔 総高114.0 cm (図版12-4)

地輪 正面幅47.0cm 高さ32.0cm 比高0.69 種子五輪定種子「ア」の四転。  
水輪 心径44.5cm 高さ35.0cm 比高0.79 種子正面と右面に雄渾な「ア」を配す。  
火輪 軒幅47cm 軒厚み 5.0cm 軒幅 8 cm 高さ25.0cm 比高0.53  
風輪 直径18.5cm 高さ 9.0cm  
空輪 直径18.0cm 高さ13.0cm きれいな宝珠形。

＊5号 五輪塔 総高153 cm (図版12-5)

地輪 正面幅58.0cm 高さ37.0cm 比高63.7 種子四面に五輪定種「ア」四転梵字。  
水輪 直径65.0cm 高さ41.0cm 比高63.1 種子回面に五輪定種子「バ」の四転。  
火輪 軒幅約55.0cm 軒口厚み 9.0cm 棟幅22.0cm 高さ38.0cm 比高0.70 種子四面にラ  
ッタークーラー 梵字を配す。  
風輪 心径30.5cm 高さ14.0cm 回面の梵字は、カッターカー□(欠損)が彫ってある。  
空輪 心径32.5cm 高さ23.0cm 宝珠形四面に、キアーバーキアー□欠損が彫ってある。

＊6号 五輪塔 総高75cm (火輪以上を除く) (図版12-6)

地輪 正面幅55cm 高さ31cm 比高45.9 各面に「ア」の四転梵字を径23.0cmの月輪でかこ  
み蓮華座に据える。梵字の書式、彫り並びに蓮華文の整った形は鎌倉時代の盛期にか  
なう様式である。  
水輪 心径56.5cm 高さ44.0cm 比高78.5 四面に配置された「バ」の四転梵字も雄健な鎌  
倉時代の様式をのこす。頂部にまいる痕跡がみられるのは、もと頸部をそなえたもの  
が後年打砕によるものと思われ、当時は有頸五輪塔の名残りと推定する。  
風空輪 火輪がうしなわれているので、現在は地面にのっているが、様式は(5)号と類似  
風輪は径27.5cm 高さ12.5cm 梵字は、カッターカー□-□ 空輪は径26.0cm 高さ  
21.0cm 宝珠形梵字はカッターカー□-□である。鎌倉時代の遺品であるが火輪を欠く。

＊7号 宝塔（図版13－7）

基礎 正面幅57.0cm 奥行57.0cm 高さ23.0cm 四面に梵字 銘文なし。

塔身 円筒形の太い軸部と、その上に一段の頸をつける。塔身高さ70cm 軸部は、高さ61.0cm 直径49cm 梢中央に膨らみをもつ円筒形、側面に4体の大ぶりの「キリーク」を刻むが彫りに弱さが感じられる。頸部は高さ8cm 径36cmあり 上端に径15.0cm 深さ9cmの孔をうがつ。笠石以上を欠く。

＊8号 五輪塔（図版13－8）

地輪 正面幅34cm 高さ14.0cm 比高0.40

水輪 心径46.0cm 高さ35.0cm 側面に径18.0cmの月輪のなかに「ア」の四転梵字を配す。

＊9号 五輪塔（図版13－9）

地輪 正面幅47.0cm 高さ27.0cm 比高57.4 側面に月輪で「ア」の四転梵字を囲む。

水輪 心径46.0cm 高さ35.0cm 比高76.1 側面の四方に種子「ア」を刻む。

＊10号 宝塔基礎（図版13－10）

正面幅35.0cm 高さ17.0cm 比高48.5 上段に径22.0cmの皿を伏せたような形の塔身を請ける円型請座を設け、中央に径13.0cm深さ7cmの円孔を穿つのは、納髪または舍利納入のためであろう。惜しいことに塔身以上を欠いている。

＊11号 宝塔（図版13－11）

基礎 正面幅34.0cm 高さ21.0cm 比高0.61 この上に複葉八弁の反花座を設け、さらに高さ4.0cm 径22.0cmの円孔を穿ったのは10号塔と同じ目的の信仰であろう。

塔身 径34.0cm 高さ29.0cm 比高0.85 この上端に高さ3.0cm 径23.0cmの首部を設け、笠石を請ける高さ径8.0cmの枘を設ける。笠石を失っているのは惜しい。相輪2基が現在する。図版のものは長さ30cm 8輪以上を失う。図版13－13の右のものは長さ38cm 中央より縦割れになりかなりの磨耗がみられるが、僅かに原形を保っている。これが10号、11号の相輪であるかは疑わしい。

＊12号 角宝塔（図版14－14）

基礎 笠 総輪を失った高さ59.0cm、正面幅30cm 𑖀𑖡𑖛𑖜（アーノク）の梵字が刻まれている。背面は打砕され、梵字を失い、両側も梵字𑖀𑖡𑖛𑖜、𑖀𑖡𑖛𑖜が残り、約3分の1が欠落した方30cmの角柱である。四方仏はアーノクアーノクアーノクアーノクの胎藏界大日如来の信仰であったのであろう。この角柱の頂部には21.5cmの円相の痕がのこっているのは、笠石を

請ける柄の跡と推定していたが、焼米村にある焼米熊野神社社前角宝塔を実観して12号塔を角宝塔と断定した。

＊熊野神社々前角宝塔

塔身 東西幅42.5cm、南北幅39.5cm 高さ 104cm（以上） 首部の高さ 4 cm幅方28cm 基礎未定 笠幅76cm 軒口の厚み 5 cm緩かに左右に反っている。塔身の梵字は南面に弥陀三尊、西<sup>ノ</sup>牙<sup>ノ</sup>（<sup>ノ</sup>イ）北<sup>ノ</sup>（<sup>ノ</sup>イ）東<sup>ノ</sup>（<sup>ノ</sup>イ）の頭教四仏の種子を配している。宝珠は五輪塔の風空輪を補充したものである。それ故、12号塔も角宝塔の残欠塔である（推定）。

＊13号 宝塔々身（図版14-15）

腐朽の甚だしい塔身であるが、高さ56cm 軸部49cm 首部の高さ6.0 cm 径22.0cm 深さ19.0cmの納入孔があり、原初の頃は瓶形宝塔の好塔であったと思われる。

＊14号 五輪塔 境内北側にある石塔

地輪 幅37.0cm 高さ22.0cm 比高60.0 無種子。

水輪 心径33.0cm 高さ24.0cm 比高0.72

火輪 軒の辺長36.0cm 軒の厚み 6 cm 棟の幅14.0cm 高さ28.0cm 比高0.78 軒反り強く底部の膨らみ 2.0cmあり。四面に「ヲ」の四転梵字を配している。

＊15号 地輪（図版14-16）14号に隣接した大型地輪である。

正面幅54.0cm 高さ38.0cm 比高0.70 四面に五輪定種子「ア」の四転梵字を配する。以上で、堂前中世石塔の調査結果を終る。

◎主なる塔碑の解説

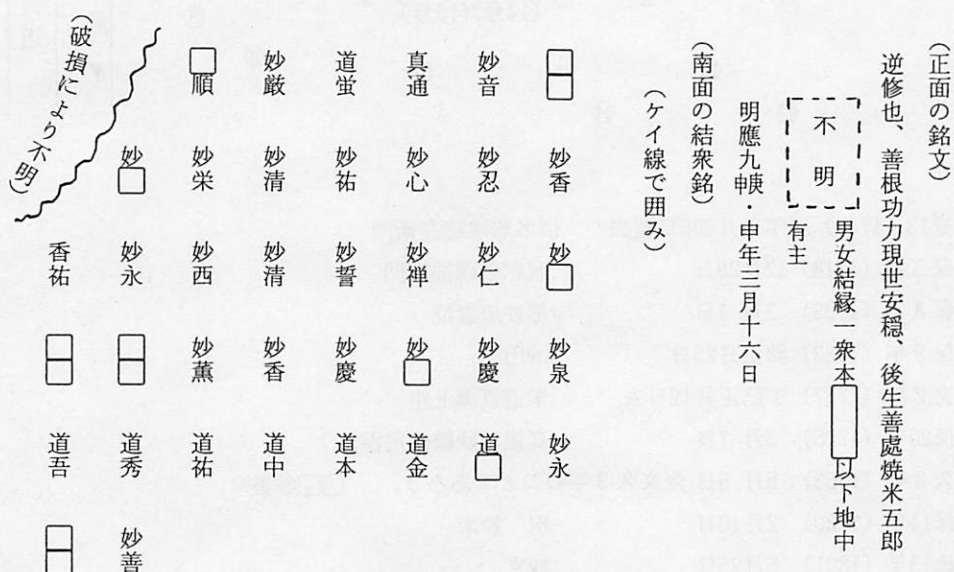
五輪塔（第5号・図版12-5）本塔組立てには調査内容に法量、五輪塔形能、梵字の配置の三点を重視し、特に真言を重視して考證にあたった。この五輪塔には、五輪塔定種子の五大のうち発心門、修行門、涅槃門、菩提門に代わって金剛界五仏の種子が上から下に彫られていたが、図版14-17～19のような空風火の三輪が一具（ひとそろい）で他の水、地の両輪はそれぞれ別石であることが梵字鑑定により知ることができた。然しながらこの五輪塔の塔形を審さに観察するに、まず地輪はやや腰高であるがバランスを破るほどのものではない。

水輪は比高が0.70で立形であたかも雨傘を半開にした収傘式五輪塔という。肥後にみられる形態である。次に軒口の面は垂直にきれ、厚さも比較的に厚く、軒反りもおだやかではあるが力強く、底面の膨らみも大きく雄健である。

空風輪は本所にある輪石中第6号のものとともに古様を呈した立派なものである。特に風輪



凝灰岩製、地上高 124cm 幅方40cm 頂上右肩部を破碎し、正面を水研ぎして原銘を消し下記のような後刻銘を彫文するが、紀年、結衆銘は原銘である。



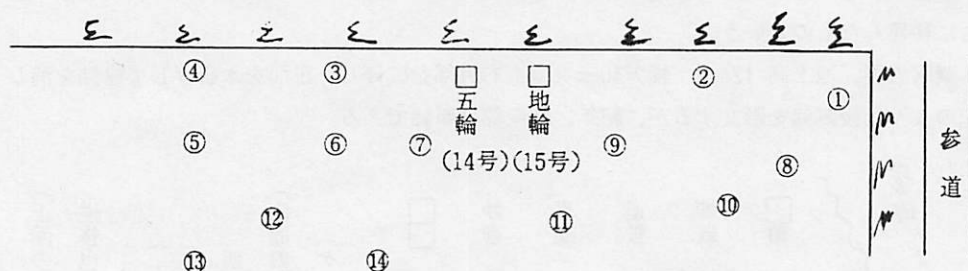
\* 県道傍焼米六地藏石塔 (凝灰岩 地上高 270cm)

笠石 露盤、宝珠は山鹿市熊入六地藏石塔を摸して作塔したものである。好塔銘に奉造立大 那檀現世安穩後生善処也、六地藏塔の位置は西福寺の参道入口である。墓地の入口に六地藏を安置することは、六道をめぐる亡者を救済するという地藏信仰によるもので、どこにでもみられるが、位置を変えずにあることは重要なことである。また頭部に述べたように山鹿熊入塔との類似性が多いのには一考を必要とする。

# \*舟津家墓地

境内に江戸時代の舟津家の墓地群がある。下にその配置図と墓誌をあげる。

## 墓石配置略図



- |   |                    |
|---|--------------------|
| ①元禄13 (1700) 辰年正月初6日逝去                    | 俗名船津徳左衛門           |
| ②享保 3 年 (1718) 12月29日                     | 寂釈教西禅定門            |
| ③享保 8 年 (1723) 2月 1日                      | 尼妙恵霊位              |
| ④享保 8 年 (1723) 卯正月25日                     | 諺少円                |
| ⑤元文 2 年 (1737) 丁巳正月12日去                   | 学道貞禅上座             |
| ⑥享保20年 (1725) 3月 7日                       | 真寂釈妙機信尼霊位          |
| ⑦□久 3 年 (1863) 5月 5日 ※文久 3 年のことであろう。 □□妙香 |                    |
| ⑧享保14年 (1729) 2月10日                       | 釈 妙米               |
| ⑨寛政13年 (1801) 5月25日                       | 妙玄                 |
| ⑩天保 4 年 (1807) 1月 9日                      | 正□大信士              |
| ⑪宝暦 8 年 (1758) 2月17日                      | 木□山洋貞踊             |
| ⑫文化元年 (1804) 12月25日                       | 妙幻                 |
| ⑬文化11年 (1814) 12月 9日                      | 婦真寒江仙翁信士 俗名 船津仁左エ門 |
| ⑭元文 6 年 (1741) 2月28日                      | 新物故歇山全休居士          |

## \*焼米城石碑

『熊本県の中世城跡』に「焼米城主郭と思われる東端部には城主と一族を祀った碑と拝殿が建立されている」と記事があるので、これについて記載したい。

碑は、自然石を積上げた基壇の上に自然石の台石をおき、凝灰岩を石材に（高さ 110cm 幅 50cm 厚さ20~30cmの正面に ぎ(ウォーン)の種子と下に蓮華座の陽刻を施している。ウォーは水天で通常は、弁戔天として尊崇する。鹿本郡植木地方や菊水町でも水神として崇拝祭祀して

いる。本丸の祭場より北をのぞむと菊池川流域の美田が望まれる。

ここには一軀の彫像が安置されているが、像高35cm 胸厚10cm 膝張り23cm 頭髮は肩に垂らし、左手に宝珠を持ち、右手に剣を握る施設が作られているが持物は失なわれている。この石像は、土地の長老舟津氏の教示によれば近くの某所からここに移した弁財天であるとのことである。この石像で注意するのは頭上に蛇がドクロを巻いたものをかぶりものとしていることである。町内のタンタンオトシの上の水汲場にはび琵琶を持った像容の弁財天がある。

## ◎結び

平安時代末期は、悪政治というよりも無政治の下に喘ぎ、末法思想に脅されていた庶民は、当時庶民間に流布されていた浄土教に救いを求め、その苦痛を和らげ甘い夢を与えられていた。浄土教の与える夢は死後他界楽土に於ける歓楽の生活である。これは天台念仏も真言念仏も共に与える夢であった。五輪塔は極楽の門を開く真言念仏の有力な道具であった。そのため藤原末期に浄土教が諸国に拡がり、五輪塔の造立も諸国に拡がった。「卒塔婆開眼の偈」に「一見卒塔婆 永離三惡道 何況造立者 必生安樂国」がある。本県下にも康平7年(1064)という早期に経塔が建てられた。玉名地方に於ても山田吉祥寺や西安寺村の西安寺に鎌倉時代早期の古塔が造建された。また、元寇の役後豪族間に造寺、造塔の動きが起った。本町に於ても江田氏の江光寺の造寺と造塔、これに前後して焼米氏の西福寺の造寺が考えられる。今回調査にあたった五輪塔等もこの造寺者と関係のあるものと考えられる。この頃の豪族は信仰のはかに自分の勢力を誇示するうえからも巨大塔を建てていたのは、大野氏の吉祥寺塔、相良氏の西安寺塔、小代氏の浄業寺塔などにその例がみられ、西福寺の場合も例外ではない。

西福寺や焼米城主を伝承では、焼米氏というが、何故か「中世古城」記載には城主名を明らかにしていない(記述)。これは『大友文書』中詫磨文書に 嘉禎2年(1236)大友親秀の譲状「豊福庄内久具十郎、同三郎を付焼米、小藤次名地頭職」とあり、焼米を豊福庄内と解したからであろう。竹崎、焼米の地名は豊福庄や玉名郡にもあるが、弘安の役の際、季長の軍船に乗っていた者のなかに「やいごめの五郎」があるということで、焼米五郎の出自を豊福か、玉名郡か曖昧にしたために城主名を明らかにしない執筆者の良心によったものであろう。しかし、竹崎季長の出自について、石井進氏は「日本歴史273」、工藤敬一氏は「日本歴史317」で玉名説を主張している。筆者の調査記録のなかでも、明應九年石幢追刻に焼米秀秋の記銘があるのも焼米氏の存在を知らせたものではあるまいか。

『小代文書』(天文19年)に東郷衆のことが記されている。東郷衆は南北朝期より戦国時代にかけて東郷荘に在住していた平姓、村上姓、焼米姓の武士団の結集であったようである。知り得たものに康應元年(1389)平朝臣景秋、享祿3年(1530)岩村下野守平景俊天文年中( )板橋豊後守平景貞一平景次一景定がいる。焼米秀秋が五郎秀秋か、南北朝の者かまたは戦国期のものかはわからない。西福寺跡石塔群が、焼米城主焼米氏の歴代墓石であるとすれば、石塔群の編年は鎌倉後期より南北朝を経て戦国時代にも亘るもののようであり、史実と一致す

るようである。

石塔の研究のことを石造美術の研究、石造技芸研究等と称し、外形を鑑賞したり、研究したりするだけで終るものではない。仏教的な遺品が造られたについて人間の歴史がそこにあるからである。

#### 四、まとめ

本年度は、新発見の遺跡が二つあった。ひとつは江栗面傾寺遺跡で、出土遺物から一応縄文晩期の遺跡と言えよう。ただ包蔵地の中心は、本年度トレンチを設定した所から若干はずれている可能性が強い。もうひとつは、久井原傾城塔箱式石棺群である。これらの二基の石棺については、まったく予想外といえる収穫であった。二基とも蓋石が消失し、年代把握の手がかりになるべき遺物が出土しなかったが、古墳時代の遺跡分布に新たな要素が加わった。久米野前畑の弥生時代包蔵地は、奥原の部分と合せると予想以上の広がりを持つことが判明し、また、近くに縄文時代の遺跡があるかもしれないという期待も生じた。

最後に、焼米五輪塔群（西福寺跡古塔群）であるが、この調査については、本文中に福島作蔵氏による詳しい報告がある。本町では石塔関係の本格的な調査は、今回が初めてであり、その意味においても有意義な調査であった。この調査を契機に、埋蔵文化財ばかりでなく歴史時代の遺構・遺物についての保存究明にも力を注いでいきたいというのが調査にかかわった者の全体の意見であった。

〈了〉



# 図 版

(写真の縮尺は不統一です。)



第2トレンチ



第1トレンチ



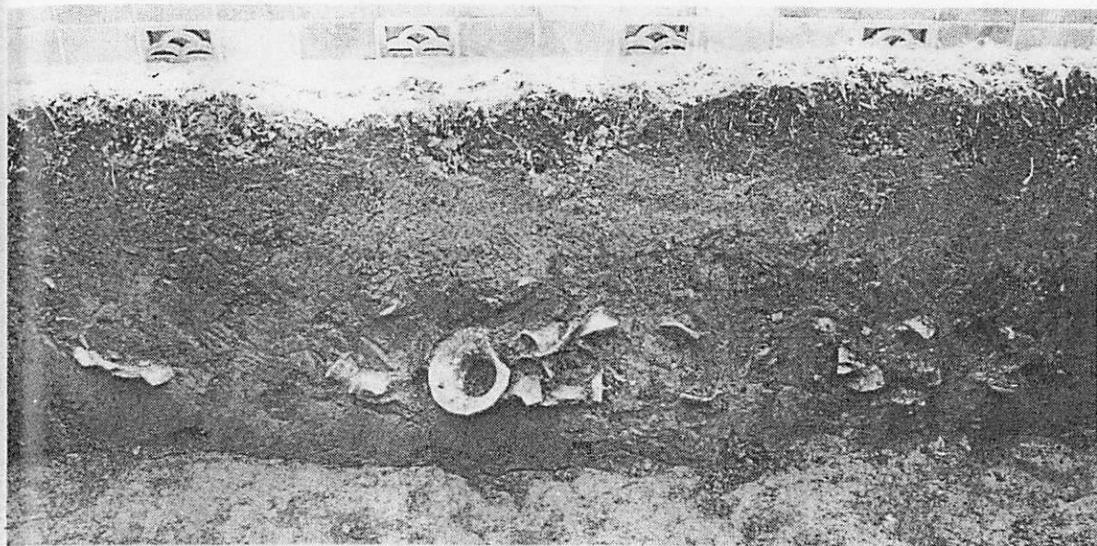
1号箱式石棺



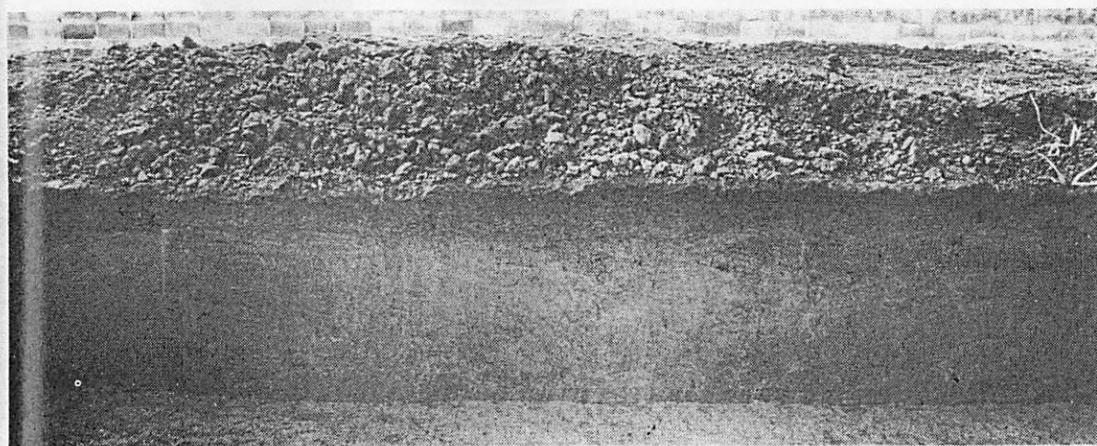


2号箱式石棺

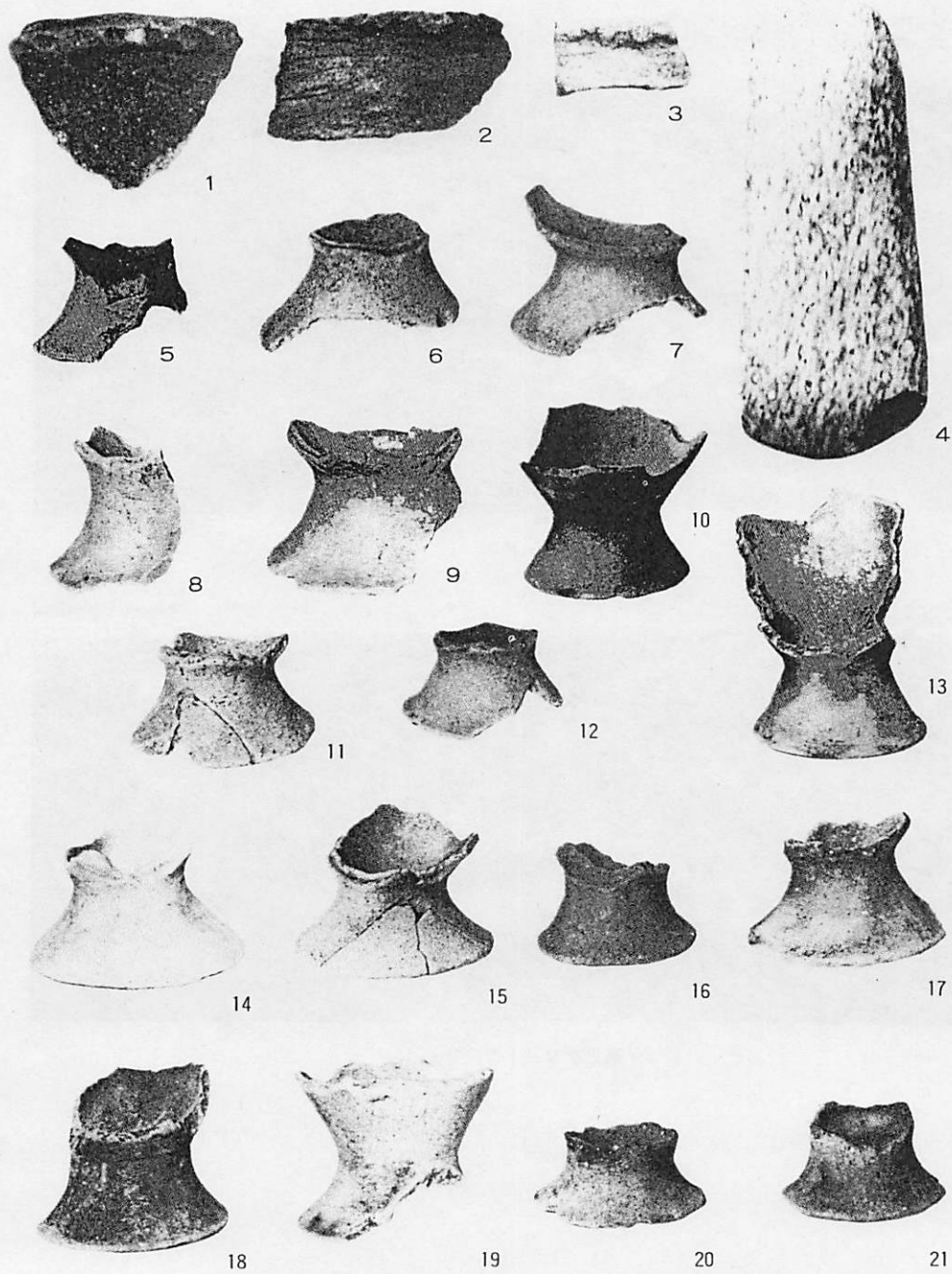




<第1グリッド>



<第2グリッド>





22



23



24



25



26



27



28



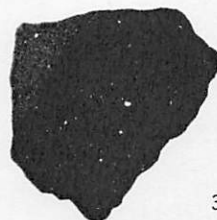
29



30



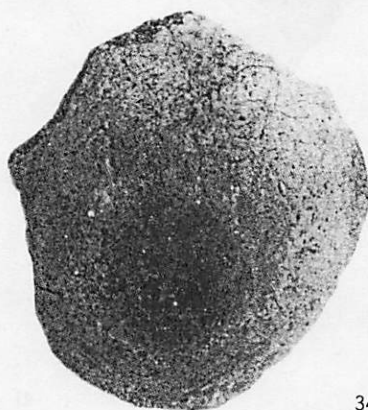
31



32

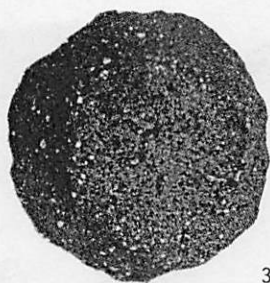


33

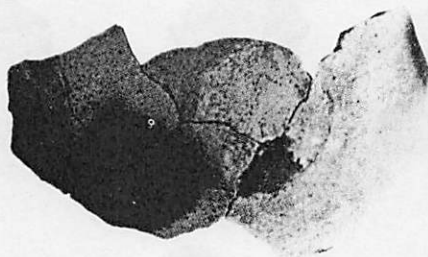


34

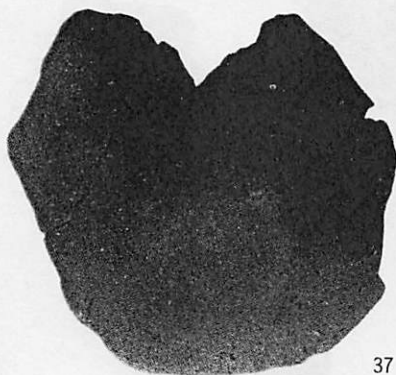




35



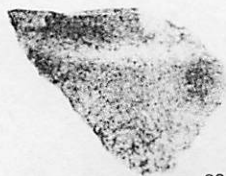
36



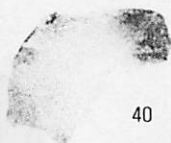
37



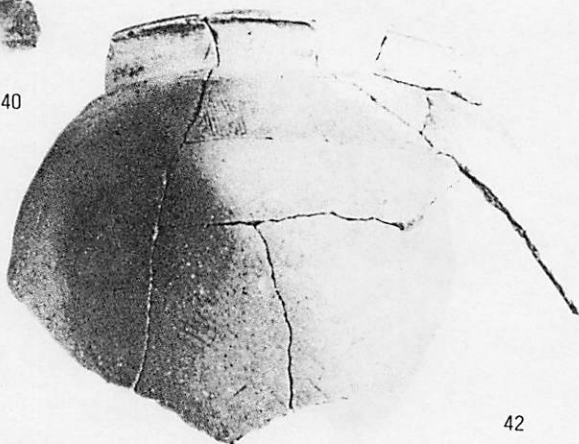
38



39



40



41

42



43



45



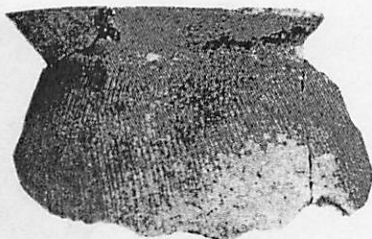
44



46



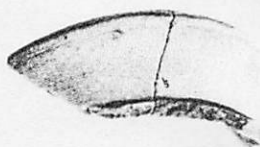
47



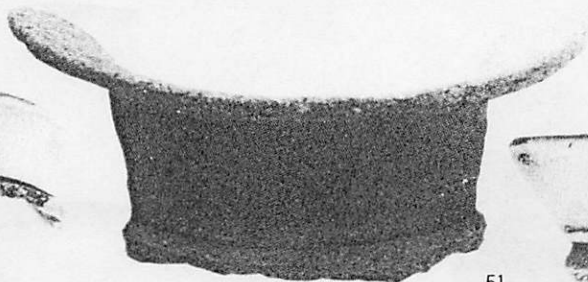
48



49



50



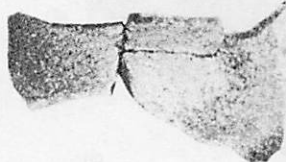
51



52

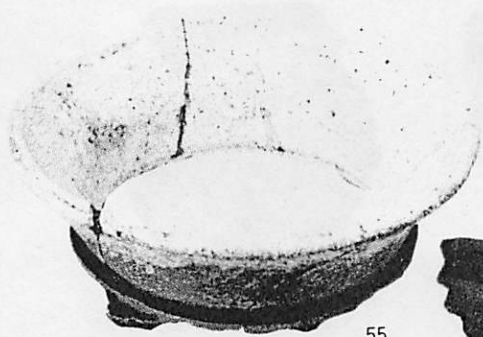


53



54





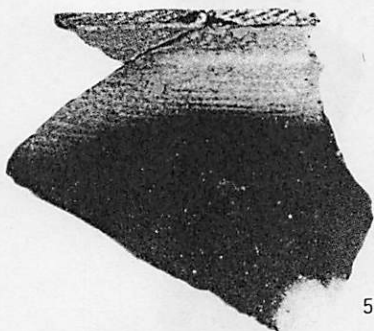
55



56



57



58



59



60



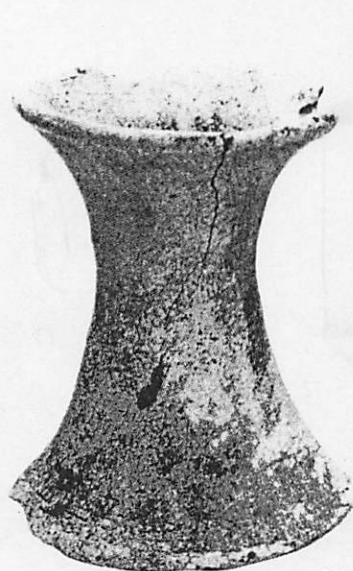
61



62



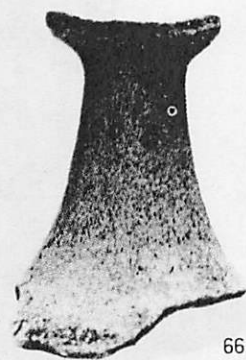
63



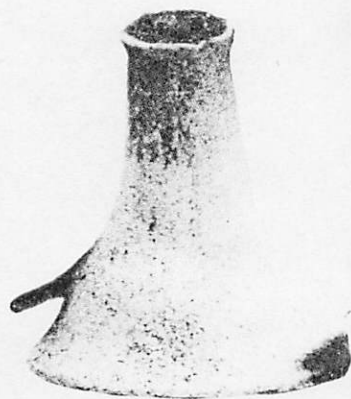
64



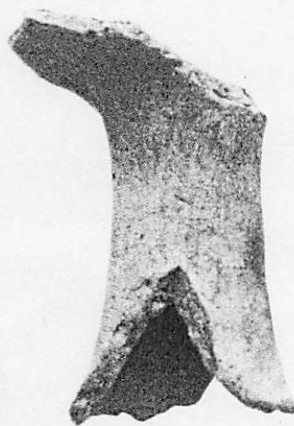
65



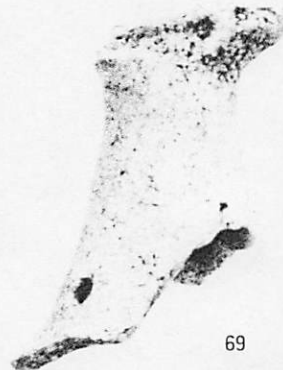
66



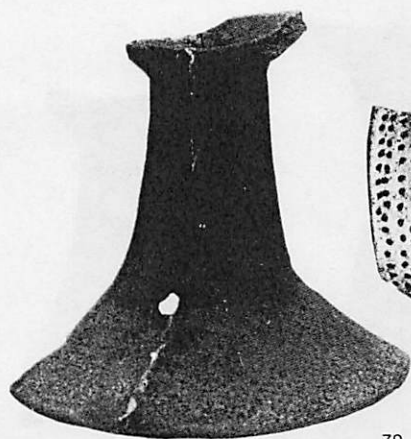
67



68

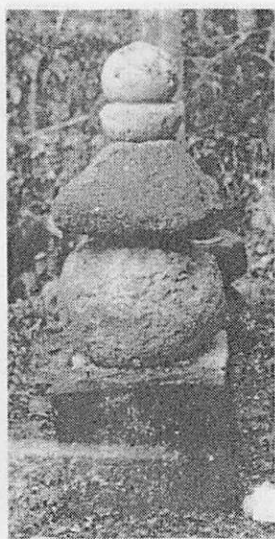


69





1



2



3



4



5



6





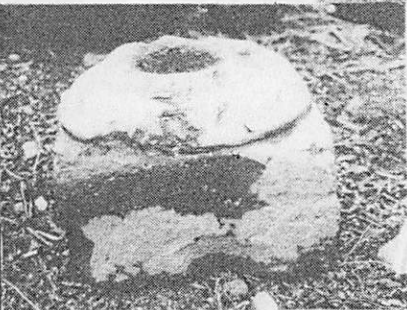
7



8



9

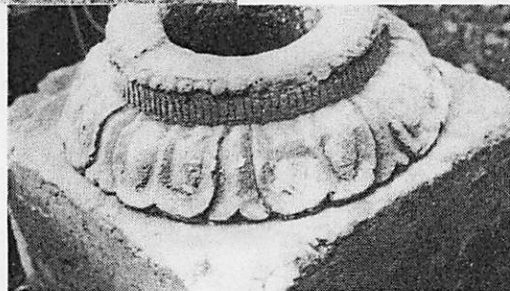


10

11

13

12







12

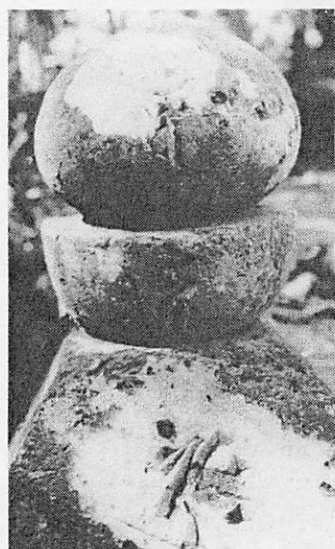


15



16

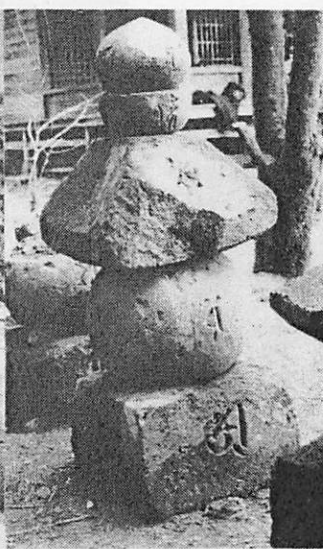
14



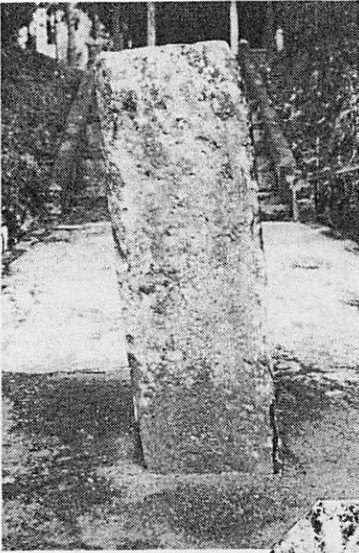
17



18



19



20



21



22



23



24

菊水町文化財調査報告 第6集

# 川 沿 (1)

昭和59年 3 月31日

編 集 菊水町教育委員会 文 化 課

発 行 菊水町教育委員会  
TEL. 096886-3131・3132

印 刷 城 北 印 刷